

鶴岡第五中学校 校歌

鶴岡第五中学校 校歌

(平成九年四月一日制定)

作詞 山崎誠助  
作曲 佐藤敏直

一 晴れ渡る 晴れ渡る 鶴北の空  
高館の 峯を離れて  
光り翔ぶ 雲の行方は  
永久の 明るい生活  
人と住む 喜び胸に  
輪を作る 掌の暖かさ

二 桜花満ちて 桜花満ちて  
香わしい 歴史を包み  
吹き通う 風の誘いは  
新しい 文化の未来  
堂雪の 誓いを日々に  
磨き合う 心と身体

三 波寄せる 波寄せる  
砕け散る 潮を浴びて  
揺るぎない 岩の姿は  
眉挙げて 友よ歌おう  
夢拓く 若い力を

希望の学園

校歌作詞者

山崎誠助氏



プロフィール 1912年 鶴岡市現千石町にて誕生。遠前小、朝一小、押切小学校、藤島小学校を歴任。劇団委の会代表、鶴岡市芸文協会会長等、多くを在任。高山樗牛賞、斎藤茂吉文化賞、その他多くの表彰を受賞。

鶴岡第五中学校 校歌の作詞に当たって

基本的に三中学の纏めではなく、新五中の未来を軸にしました。しかし、学区の優れた自然や歴史は踏まえています。

発想の根拠は、不易の人間の条件「人との共生、自然との共存」に置いています。究極の原点は愛ですが、具体的には、手を繋ぐ温もりと拡がり、平和の証としました。

また、人は考える唯一の生命、その正しい研鑽による働き、真理の探究は、緑の星永遠の未来を掌る、尊厳な使命といえるでしょう。

そして、人は歴史的存在といわれ、過去と未来に架かる橋として今があります。未来に望む夢こそは生きる意味、殊に若人に大きな夢、確かな希望がある限り、未来は信じられるように思います。肩あけて、友よ歌おう 夢拓く若い力を。

確実な自己創造を、人との連帯に依る輝かしい二十一世紀への行進、鶴五中の行く手に限りない期待を寄せています。表現には、平易さより、格調を重視したつもりです。

校歌作曲家

佐藤敏直氏



プロフィール 1936年 鶴岡市上町にて誕生。鶴岡三中、鶴岡南高校を卒業後、慶応義塾大学に進学。1957年 作曲家清瀬保二氏に師事、本格的に作曲を志望。現在、日本現代音楽協会委員長、日本音楽コンクール作曲部門審査員を在任。

鶴岡第五中学校校歌ノート

空と光、広野と花、磯と潮、詩にはこれら自然の巧みな彩りに寄せて、若さの営みが謳われています。私は少年の頃から近くに住んでいて、この地に降り注ぐ輝きが四季折々千変万化して、人々の暮らしと共に喜びや悲しみを醸し出していたことを知っていましたので、山崎先生の詩と、新たな校舎の周りがもっている薫りや色彩に、あたかも昨日の風景が今日も続いているような自然さで入ることができました。

ですから、旋律の発端は、あまり気張らないうちに生まれました。そうして叶うことなら華々しさよりは優しさを歌いたいという願いがあったので、叙情的な気分をいつも残しながら、やがて少しずつ高揚して行く構成にする方法を選びました。その結果多分、校歌の概念からはやや外れた音楽になったかも知れませんが、でも私は21世紀を生きる若者達にとって、単なる学校への郷愁ではなく、歌がいつも心の奥に響いて味のある学生生活の記憶となるような新しい校歌を書いたつもりです。

校章図案考案者

齋藤正志氏



プロフィール 1926年 鶴岡市現山王町にて誕生。羽黒中学校教頭、鶴岡西郷小学校校長を歴任。その後、鶴岡市視聴覚センター運営審議会委員、副委員長を務めた。白鷺社の会員として個展等活発に活動。第三CC、区内教育懇話会等のシンボルマークの入選多数。

鶴岡五中の発展に願いを込めて

校章はその学校の顔である。

時には校旗として厳然と胸を張り、時には応援旗として翻えり皆を励ます。又、その顔はその学校の個性でもある。

昨年之事になるが、大山中、加茂中、西郷中の三校が統合する事で、新校章の募集があった。考えてみたが、それぞれの顔をいくらかねまわしても新しい顔が出来るとは思えない。校名が鶴五中と決定したからには、私は視点をそこに置くべきであると心に決め、そのイメージ化に務めた。つまりは、三校が結束して、それぞれの特徴を出し合い、助け合い、励まし合うことでより重厚な校風が作られ、力強く翔くことである。

そんな事から校章には五中の二字を入れることにした。

左右同形で安定感を持たせるために、あえて篆書体を選んだ。そして三校を表わすため鶴岡市の鶴を戴き三対の翼で支え、翔かせてみたのである。金と銀色の光を輝かせながら、今はスタートした鶴五中が一九丸となって、雄々しく、美しく発展することを願ってやまない。



校章図案受賞者

(佳作) 秋野晴男氏、阿部 勇氏、伊藤 稔氏、松田玲子氏

